

# 自分を縛らせるクリシュナ神

## イーシャ・サーデサイによる再話

たくさんのユガをさかのぼった古い時代のインドで、シュリー・クリシュナの姿を取った神は、ゴークルという村の緑豊かな野原と木立の中でその幼年期を過ごしました。そこに住む幸運に恵まれた農民や牛飼いにあって、それは魅惑的な素晴らしい時でした。毎日、幼いクリシュナは、新しいリーラー——神の新しい遊びや戯れ——を作り出し、皆はそれを見て、驚き、学びました。

そのようなある日のことです。クリシュナの育ての母のヤショーダが、大きな素焼きのつぼを前に置いて、家の玄関先に座っていました。つぼの中にはクリームがいっぱい入っていて、その中心には、ひもが巻かれた太い木の棒がありました。ヤショーダが、ひもの両端を交互に引くと、棒はこちら側に、そして向こう側にと回転しました。彼女はマカン、つまりバターを作っていたのです。

彼女が前後にひもを引っ張り、クリームがようやくドロツとしてバターになっていくにつれて、彼女の顔は汗に光り、髪は額に貼り付きました。あまりにもこの仕事に没頭していたので、彼女はクリシュナが家の中から近づいてくることに気がつきませんでした。

「マイヤー？」と、かわいらしく無邪気な声がしました。その時彼はまだとても小さく、よちよち歩きの時期を過ぎたばかりでした。「お母さん？」

ヤショーダは驚いて顔を上げました。墨の粉で顔が縞模様になったクリシュナが前に立っていました。彼はしばらく泣いていたかのように見えました。

「マイヤー！」と、彼はヤショーダがどうしたのか聞く前に、ふてくされて繰り返しました。「おなか空いた！ 食べものをちょうだい」

彼がそう言うと、ヤショーダは肩の力を抜いてほほ笑み、「それだけ？」と言いました。彼を自分の膝の上に乗せ、バターの小さな塊を彼に与えると、また攪拌(かくはん)し続けました。

ところが少しすると、再びヤショーダは止まりました。クリシュナは、驚いて目をぱちくりさせて彼女を見上げました。彼女の顔には動揺した様子が見えました。

「牛乳！」と、ヤショーダは叫びました。「かまどにかけたままだった！ 吹きこぼれてしまう！」

彼女は慌ててクリシュナを膝から降ろすと、家の中に走って行きました。クリシュナは彼女が行くのを見ていました。眉を寄せ、口はへの字になって危険なほどに震え始めました。お母さんは、彼よりも牛乳の方が大事なようなのです！

つぼの中のバターが見えました。突然、考えが浮かびました。彼は、つぼに歩み寄り、棒を引き抜き、そして、ガッシャーン。破壊的な一撃で、彼はその棒をつぼに振り下ろしたのです。

つぼの破片があちこちに飛び、クリーム状の白いマカンは目に入る至る所に飛び散りました。少しも無駄にしないようにと、クリシュナはそばにあったお碗に入れられるだけのバターの塊をすくいました。彼は、お碗を自分の胸に抱えて指をなめると、戦利品を持って走り去りました。

つぼが割れる音を聞いたヤショーダは、様子を見に急いで出てきました。しかしその時すでに、クリシュナはいませんでした。彼女は、一日の仕事の残骸と、玄関先につぼの破片が散乱している惨状と、バターでテカテカした地面を見回しました。

ヤショーダは目を閉じて、こめかみをさすりました。彼女のクリシュナがいたずらっ子であることは知っていましたが、これはやり過ぎでした。なぜ彼は、いつもこんな騒ぎを起こすのでしょうか。一体、何度バターを盗もうとしたのでしょうか。ため息をついて、彼女はサリーの裾をスカートに押し込むと、彼を捜し始めました。

さて、クリシュナは神の化身なので、望むだけ自分を隠すことができました。彼は自由自在に、そして慈悲深さから、人に姿を見せるのでした。ですから、彼は家の近くの高い木に腰掛けて見っていました。ヤショーダが彼の名前を叫びながら、低木の茂みの中をのぞき込み、そして隣人たちに彼女のバターを盗んだ息子はどこに行ったのか尋ね、方々走り回っているところを。

しばらくそれが続くと、ヤショーダは本当に気が狂いそうに見え始め、クリシュナは気の毒になりました。彼は彼女の注意を引こうと、さらさらと木の葉の音を立てました。

ヤショーダはすぐにその音がする方を見上げました。彼女は息子が彼と同じ木にいるサルに向かって、バターの塊を投げるのにすっかり夢中になっているのを見つけました。彼は何回か投げるごとに止まっては、自分でもバターを食べていました。

「クリシュナ！」と、ヤショーダは陰しい声で叫びました。「すぐにその木から降りなさい。おまえのいたずらはもうたくさんです！」

クリシュナはきらめく笑顔を彼女に投げ掛け、素直に滑り降りて来ました。彼女の前に降り立つと、彼の目は無邪気さで大きく見開かれ、口と手はバターまみれでした。

「マイヤー、ぼくを捜していた？」

「私が——私がおまえを捜していたですって？」と、信じられないといった様子で彼女は言いました。彼女は頭を振り、それ以上何も言わずに、手を取ってクリシュナを家の方に引っ張って行きました。

玄関先に着くと、「ここにいなさい」と、彼女は言いました。「動いてはいけません。私はすぐに戻ります」。彼女は家の中へと消えました。

すぐに彼女は戻って来ると、その腕にはとても長いロープを巻き付けていました。

「おまえをこの柱に縛り付けます」と、家に付いている柱の1本を指さしながら、彼女は言いました。「もう逃げることはできません。もうバターのつぼを壊すことはできません」

クリシュナは、ただ同じようにえくぼを浮かべてヤショーダを見返しました。彼の表情はあまりにも天使のようで、彼女はもう少しで目を背けなければならないところでした。実際は、彼女の心は彼を木の上に見つけた瞬間、ほとんどかき乱されそうになっていたのです。しかし——これはやらねばなりません。ふざけた態度を続けさせるわけにはいきません。クリシュナにロープを巻き付ける前に、彼女は心を鬼にしました。

彼女はロープの片方の端を持ち、腕を伸ばして残りを柱の周りに渡しました。しかし、それをクリシュナのおなかの周りに引っ張り寄せようとした時、とてもおかしなことが起きました。ロープは短過ぎたのです！

ヤショーダは理解できませんでした。ロープは十分な長さだと確信していたのです。実のところ、必要な長さよりももっと長いだろうと思っていたのです！ 彼女はもっと強く引っ張ってみましたが、全く用をなしません。ロープは神の周りに回りきらないのです。

何としてもやり抜くため、ヤショーダはさらにロープを取りに行きました。彼女はこの新たなロープをこれまで使っていたものに結び付け、つなぎ合わせたロープは、今や庭全体を横切って伸びていました。ヤショーダは満足して息子の方に向き直り、再びロープを彼の周りに回しました。

しかし再び——訳も分からず、どんな筋の通った説明もつかず——同じことが起こりました。ロープは短過ぎたのです。

「何てこと？」と、ヤショーダはあえぎながら言いました。困り切って他にどうしたらいいかも分からず、彼女はロープをぐいぐいと引っ張り続けました。なんとかクリシュナの体の周りに回すのに十分な長さになることを願って、彼女は継ぎ足すためのもっともっと長いロープを探し続けました。このようにして、何時間もが過ぎました。ヤショーダの腕は疲れて力が入らなくなりました。息も上がりました。彼女が何をしても、ロープはいつも指の幅数本分だけ短いままでした。

ついに、ヤショーダはロープを手放しました。口をわずかに開き、眉間に小さくしわを寄せ、彼女は息子をまるで初めて見るかのように見ました。この間ずっと無言だったクリシュナは、ただ彼女を見返しました。彼の目はきらきらと輝いていました。

ヤショーダは彼を見詰め続けました——困惑し、それが驚きに変わり、驚きは畏敬の念に変わりました。ヤショーダは彼女自身の内側に変化を感じました。愛——偉大な愛のうねり——が、彼女の心からあふれ出しました。敬愛と献身が彼女の存在を洗い清めました。彼女の目は涙でいっぱいになりました。

クリシュナはほほ笑みました。「マイヤー」と、彼は言いました。「もう一回試したい？」

そしてそう言うと、神はロープの両端を拾い上げて、彼女に差し出しました。



© 2019 SYDA Foundation®.著作権所有。

この物語は、『シュリーマッド・バーガヴァタム』、あるいは『バーガヴァタ・プラーナ』の中で語られているクリシュナ神の古典的な物語に触発されたものです。この物語はしばしば、「ダーモーダラ・リーラー」と呼ばれます。ダーモーダラはクリシュナ神の名前であり、その意味は、「胴の周りにロープを縛り付けた神」で、『シュリー・ヴァイシュヌ・サハスラナーマ』の中で歌われる名前の一つです。